「かけ踊り」再考

中村茂子

はじめに
一　「かけ踊り」その名称と分布
二　中部日本山間地域に伝承された「かけ踊り」の特色
　1　長野県下伊那地方の「かけ踊り」
　2　岐阜県郡上地方の「かけ踊り」
三　風流踊りの展開
　1　風流拍子物（ふりゅうはやしもの）
　2　風流踊り
おわりに－現行「かけ踊り」の位置づけ－

はじめに

平成二一年度に文化庁が実施した「下伊那のかけ踊」調査報告書作成のプロジェクトに参加する機会に恵まれ、四〇余年ぶりに長野県下伊那郡泰阜（やすおか）村の「榑木（くれき）踊り」調査を実施した。現在、「榑木踊り」を伝承しているのは温田のみであり、平成一七年を最後に中断した泰阜村梨久保では、かつての伝承者から聞き取り調査を行い、氏神池野神社境内の保管庫に所蔵されている「榑木踊り」の諸道具を拝見させてもらった。「榑木踊り」「念仏踊り」「盆踊り」などとも称している下伊那の「かけ踊り」伝承地は山間地帯に位置し、現在深刻な過疎化と高齢化を阻止できない状況にある。筆者は、「下伊那のかけ踊」調査報告書の総説を担当することになり、[1]その過程で昭和四七年の拙稿「かけ踊の研究」を読み返す必要に迫られ、[2]「かけ踊り」に関して再考察の必要を感じた。

平成二二年五月と六月に相次いで出版された植木行宣　芸能文化史論集3『風流踊とその展開』、および山路興造『近世芸能の胎動』が、「かけ踊り」再考察のきっかけとなった。[3]植木氏は一定地域に集中する風流の伝承を押さえ、そこに措定される芸能文化圏の類型化を行い、各地域的類型を比較して類似とともに相違を問う研究が要請されると指摘し、現地調査記録を多数掲載しておられる。[4]また、山路氏は文献史料を重視され、一四世紀末の「風流拍子物」は盆の「念仏拍子物」と正月の「松囃子」であり、一五世紀後半から

は奈良に風流踊りが展開、一六世紀初頭になると京都・奈良の郷々で組織された風流踊りが各所へ掛けわたり、従来の「拍子物」は、風流踊りの「中踊り」として「側踊り」の中心に仮装姿で踊りを囃す役割を負うようになった。そして、現行西日本の風流踊りの多くは、「側踊り」を失って「中踊り」が固定化したものであり、「側踊り」は独立して近世の「盆踊り」へ展開したという。[5]

両氏の指摘を踏まえた上で、現在下伊那地方と郡上地方に集中的に伝承されている「かけ踊り」の風流踊りとしての位置づけを行ってみたい。

一　「かけ踊り」その名称と分布

管見のかぎり「かけ踊り」の現存伝承は、下伊那地方と郡上地方だけである。この名称について、歴史的には一五世紀前半から京都や奈良の貴族が残した日記の中に「念仏拍物」「拍物風流」「念仏風流」などが、集団で目的地へ練り込んで踊る行為を「風流を掛ける」という記述がなされている。その行為を種目名として用いたのが、「かけ踊り」という名称で継承されたと推測してみた。「かけ踊り」の史料としては、江戸時代の後期に記された喜多村信節『嬉遊笑覧』巻五（歌舞）であるが、そこには「かげ踊」という記述がなされており、解説の一部に「うらぼんになれば（中略）十五夜の月の輪のことくにこそをどれと有り　打そろひて他處に行てをどるをかげをどりといふ　（未得）が狂歌にかけられてあふむかへしにきたるこそ小町をどりの歌のさまなれ　古き俳諧などに多くみえたり」と記されている。[6]『嬉遊笑覧』を手がかりに『かけ踊り覚書』を刊行した中村　浩は、下伊那地方に分布している「かけ踊り」が全く別ものであり、むしろ盆踊りに近いものであると記している。[7]

先に記した拙稿「かけ踊の研究」に示したもので、文献から採取した「かけ踊の分布」では、長野県の四カ所中（盆踊り3・お練り祭りの踊り1）・岐阜県の一一カ所中（豊年踊り10・雨乞い踊り1）・愛知県の三カ所中（雨乞い踊り2・盆踊り1）・三重県の一カ所は盆踊りとして伝承されていた。「かけ踊り」と称されながら、実際には盆踊り・豊年踊り・雨乞い踊り・お練り祭りの踊りであったことを注意しておきたい。これら四県は相互に隣接しており、「かけ踊り」が無関係の伝承であったとは考えにくい。[8]

次ぎに、筆者が現地調査に関わった郡上地方の「かけ踊り」と下伊那地方の「かけ踊り」について具体的に記すことで、その芸態を理解しておこう。

二　中部日本山間地域に伝承された「かけ踊り」の特色

1　長野県下伊那地方の「かけ踊り」

下伊那の「かけ踊り」に関しては、平成二十一年度　文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」『下伊那のかけ踊」調査報告書』が刊行された。[9]以下、この報告書を参考に

下伊那に伝承されている「かけ踊り」の特色について記す。現行「かけ踊り」は九カ所であり、それぞれの種目名・（伝承地名）・実施日・踊り場は、以下の通りである（P．43　分布図参照）。

① 下栗のかけ踊り（飯田市上村下栗）8月15日に氏神の舞処・神社境内・神社下の広場

② 和合の念仏踊り（下伊那郡阿南町和合）8月13・16日に熊野社・宮下家・林松寺　14・15日・林松寺

③ 日吉の念仏踊り＜日吉の大社念仏とも＞（同郡阿南町和合日吉地区）8月13・16日に八幡様前の広場

④ 大河内のかけ踊り（同郡天龍村神原大河内地区）8月14日に念仏堂前・新仏の家　16日に集会所広場

⑤ 坂部のかけ踊り（同郡天龍村神原坂部地区）8月14日に堂の庭・金比羅様の庭

⑥ 向方のかけ踊り（同郡天龍村神原向方地区）8月14・16日に長松寺

⑦ 満島神社の秋祭り＜かけ太鼓＞（同郡天龍村平岡）10月第2土・日曜に満島神社・前宮・道中・御旅所（三カ所）

⑧ 中井侍秋例祭＜宿入り・道中囃子＞（同郡天龍村平岡中井侍地区）11月末土・日曜に小高明神・白山権現で隔年

⑨ 温田の榑木踊り（同郡泰阜村温田）8月第4土曜にお祭り広場・お稲荷様鳥居前・本宮・南宮神社鳥居前・神社の庭

その他に中断が一カ所「梨久保の榑木踊り」、廃絶が以下の七カ所である。①須沢のシデ踊り（飯田市南信濃須沢地区）②心川の念仏踊り（阿南町和合心川地区）③大久那のかけ踊り（天龍村神原大久那地区）④漆平野の榑木踊り（泰阜村漆平野）⑤我科の榑木踊り（泰阜村我科）⑥大畑の榑木踊り（泰阜村大畑）⑦田本の榑木踊り（泰阜村田本）である。以上、現行以外の伝承地も含めた一七カ所中「○○のかけ踊り」と称しているのは、現行の①④⑤⑥と廃絶の③の五カ所だけであり、地域的には飯田市の下栗と天龍村の四カ所である。その他の伝承地では泰阜村の「榑木踊り」が六カ所、阿南町の「念仏踊り」が三カ所、天龍村平岡の祭礼の踊りが二カ所、飯田市須沢の「シデ踊り」が一カ所となっているが、飯田市下栗の「かけ踊り」も戦後の復活以前は「シデ踊り」と呼ばれていたという。

次ぎに、現行伝承地の「踊り手」「その他の諸役」「演目」を比較してみよう（P．42　第一表　参照）。

① 下栗　「踊り手」→太鼓打ちと太鼓持ち（2組）・棒振り（2人）・鉦打ち（1人）・小女郎（少女4人）。「その他の諸役」→笛吹き・白幣持ち・金幣持ち（各1人）・神社旗（2人）・歌（長老・村人多数）他。「演目」→御宮踊り・宮下の庭・あみだ様の踊り・がらん踊り・みだ様踊り（現在では抜粋した詞章を適当に並べ、先に記した三カ所で同様に歌い踊っている）。＜事例の番号は第一表の番号＞

② 和合　「踊り手」→太鼓打ちと太鼓持ち（4組）・鉦打ち（1人）・ヒッチキ棒とササラ（2組）・ヤッコ（2人）。「その他の諸役」→笛（6人）・名号旗（2人）・切り子燈籠（1人）・花（少

女1人）・柳（少女1人）・他。「演目」→庭入り（行列・ヒッチキ拍子）・念仏・和讃（多数）・手踊り

③　日吉　「踊り手」→太鼓打ちと太鼓持ち（2組）・鉦打ち（1人）・ヒッチキとササラ（2組）・ヤッコ（2人）。「その他の諸役」→糸燈籠（1人）・幟旗（1人）・花（2人）・傘（2人）・他。「演目」→庭入り（行列・ヒッチキ）・念仏・和讃（多数）・手踊り

④　大河内　「踊り手」→太鼓打ち（8人）・鉦打ち・ヤッコ・ヤナギ（各1人）。「その他の諸役」→名号旗・切り子燈籠・笛吹き（各1人）・他。「演目」→かけ踊り・念仏和讃

⑤　坂部　「踊り手」→太鼓打ち（13人）・鉦打ち（1人）・棒振り・笹（各2人）。「その他の諸役」→槍・薙刀（各2人）・幟持ち・切り子燈籠・笛吹き（各1人）・他。「演目」→堂の庭の踊り・渡り拍子・金比羅様の庭の踊り（伊勢音頭・和讃・手踊り）

⑥　向方　「踊り手」→太鼓打ち（7人）・鉦打ち（1人）・柳・奴（各2人）。「その他の諸役」→　笛吹・大燈籠・小燈籠（各1人）・他。「演目」→拍子ぞろえ・道行き（祇園囃子・渡り拍子・十六・ぶっきり）・庭ほめ・念仏・蚊ばらい踊り・手踊り・引き踊り

⑦　満島　かけ太鼓（明治末期に再構成して行われるようになった）。

⑧　中井侍　「踊り手」→大太鼓（1人）・小太鼓（3人）・花笠（少女5人）。「その他の諸役」→塩祓い・大傘（歌を兼ねる）・笛吹き（各1人）・神社旗（2人）・他。「演目」→宿入り・宮ほめ・道中囃子・笠くずし

⑨　温田　「踊り手」→大太鼓（1人）・中と小太鼓（3人）・鉦打ち（4人）。「その他の諸役」→柳（1人）・切り子燈籠（5人）・神社旗（多数）・他。「演目」→お祭り広場・お稲荷様鳥居前・本宮・南宮神社鳥居前・南宮神社前・笠破き

第一表から読み取れるそれぞれの特色は、以下の通りである。

☆　**踊り手**

ア　踊り手の中心は太鼓打ちと鉦打ちであるが、下栗・和合・日吉の三カ所では、太鼓打ちと太鼓持ち・ヒッチキ（棒振り）と（ささら摺り）がペアで踊り、三カ所それぞれに少しずつ違った芸態を示している。和合と日吉が「ヒッチキ拍子」と「念仏」の時だけペアで踊るのに対して、下栗は歌の切れ目で笛が演奏される時にだけペアで踊る。

イ　その他の地域では、太鼓持ちを失っている代わりに太鼓打ちの数が増加し、ささら摺りを失っているため、棒振りとのペアで踊る「ヒッチキ拍子」はなく、坂部では棒振りと笹がそれぞれ単独に踊り、大河内と向方では棒振り・ささら摺りがヤッコ・やなぎに変化している。

☆　**その他の諸役**

ア　六カ所で切り子燈籠（大・小燈籠）が、七カ所で名号旗・神社

旗・柳・傘・花などの作り物が行列に加わっている。踊りの時は柳・傘・花が輪の中心に位置し、燈籠・旗・笛などは輪の外側に位置している。

イ　笛は、道行きや歌の切れ目に演奏され、重要な役割を果たしている。

☆　**演目**

ア　五カ所で「道行き」「庭ほめ」「念仏」「和讃」「手踊り（盆踊り）」「引き踊り」「笠くずし」「笠破き」などを踊っている。

イ　伝承地ごとに演目名はさまざまであるが、多くの場合踊り場名・神仏名が用いられている。

☆　**その他**

ア　全ての伝承地で太鼓打ち・鉦打ちを中心として行列を調え、何カ所かに練り込んで踊る。その度に入り踊り・本踊り・引き踊りを繰り返す。

イ　「かけ踊り」以外の種目名として、「ヒデ踊り」「念仏踊り」「かけ太鼓」「榑木踊り」と称されている。

ウ　踊り歌の多くは「東西静まれ　おしずまれ」という詞章で始っている。

エ　「かけ踊り」終了後に踊られる「手踊り」は盆踊りであり、一般の人々が加わって、自身で歌いながら踊る古い形式のものである。

2　岐阜県郡上地方の「かけ踊り」

郡上の「かけ踊り」については拙稿「かけ踊の研究」を参考とした。筆者が郡上の「かけ踊り」調査を行ったのは、一九七一年のことであり、ほぼ四〇年以前になる。当時の郡上地方には、一〇カ所で「かけ踊り」「かき踊り」と称されている踊りが、氏神の秋祭りに奉納されており、それら一〇カ所は次の通りである（P．44分布図参照）。これらの伝承地は、かつて行政区画上郡上郡に属していたが、平成一六年に八幡町・白鳥町・大和村・高鷲（たかす）村・美並村・明宝村・和良村の二町五村が合併して郡上市となった。

①（旧）大和村牧　8月7日　妙見神社祭礼（中断）

②（〃）八幡町河鹿　9月4・5日　白山神社祭礼（例年）

③（〃）明方（明宝）村寒水（かのみず）　9月8・9日　白山神社祭礼（例年）

④（〃）大和村万場　9月12日　熊野神社・南宮神社祭礼（何年目かに一度・未定）

⑤（旧）白鳥町中津屋　9月15・16日　白山神社・八幡神社祭礼（数年に一度）

⑥（旧）白鳥町向小駄良（むかいこだら）　9月16日　神明神社祭礼（何年目かに一度・未定）

⑦（旧）大和村中神路（なかかんじ）　9月22・23日　白山神社祭礼（何年目かに一度・未定）

⑧（旧）大和村口大間見（くちおおまみ）　10月1日　白山神社祭礼（何年目かに一度・未定）

⑨（旧）八幡町坪佐　10月1日　百合若神社祭礼（一〇～十数年に一度）

⑩（旧）大和村剣（当時未調査）

当時、毎年踊りを奉納していたのは河鹿と寒水の二カ所だけであり、他の地域では何年目かに一度の奉納で、次回は未定であった。その理由について伝承地域の人々は資金不足、人手不足などをあげていたが、故人の郷土史家寺田敬蔵は、郡上では「かけ踊り」は祈願の踊りであり、「かき踊り」はお礼踊りであるという。この説は、伝承地の多くが「嘉喜踊り」と称し、何年かに一度奉納して次回の予定が未定である理由を理解しやすい。

次ぎに、下伊那地方と同様に河鹿・寒水・中津屋・坪佐の四カ所について、「踊り手」「その他の諸役」「演目」について記してみよう（P. 42　第二表参照）。

②　河鹿　「踊り手」→中踊り（拍子方4人・鉦引き1人）・側踊り（剣振り・ささら摺り各2人・田打ち・花笠各12人・しで笠20人・おかめ・大黒各1人・他）。「その他の諸役」→出しの花・大傘（各1人）・幟（2人）・笛（10人）・音頭と歌（各4人）・警護（10人）・他。「演目」→福江の木・他

③　寒水　「踊り手」→中踊り（折り太鼓3人・鉦引き1人）・側踊り（悪魔払いと薙刀振り各1人・ささら摺り・田打ち各16人・大黒・おかめ各2人・奴大・小各8人・花笠12・他）。「その他の諸役」→禰宜・出花持ち・台傘（各1人）・露払い・音頭（各2人）・幟5人・笛16人・踊子（地歌）頭1人と踊子（地歌）15人・他。「演目」→中桁前の踊り・お庭踊り・拝殿前の踊り・盆踊り

⑤　中津屋　「踊り手」→中踊り（拍子打ち3人・鉦引き1人）・側踊り（花笠12人・長刀2人・おかめ1人・踊子＜奴＞37人）・他。「その他の諸役」→高鼻・露払い（各1人）・笛・歌おろし（各10人）・大神楽1組・他。「演目」→本踊り・十禅寺・加屋志の踊り。

⑨　坪佐　「踊り手」→中踊り（拍子方4人・鉦引き1人）・側踊り（長刀振りと剣振り　各4人・奴16人・田打ち13人・花笠12人・他）。「その他の諸役」→笛8人・歌おろし4人・出し花・田楽・大将（各1人）・露払い・先箱・弓（各2人）・他。「演目」→本歌・引き歌。伊勢大神楽・他

なお、伝承地では「中踊り」「側踊り」という用語を使用していない。右の内容によって理解できる特色は、次の通りである。

☆　**踊り手**

ア　「中踊り」と「側踊り」で構成されている。

イ　「中踊り」の主役である3～4人の太鼓打ちは、「オチズイ」などと称される美しい作り花を背負い、腹に太鼓をつけて打ちながら踊り、「中踊り」には鉦打ち1人が加わっている。

ウ　「中踊り」を囲んで踊る「側踊り」は、全員が統一装束ではなく「田打ち・花笠・ささら摺り・奴」などが、それぞれ一〇人前後で同じ装束をつけ、「大黒・おかめ・長刀・剣」などは1～2人ずつで構成されている。

☆ **その他の諸役**

ア　笛吹き・歌うたいなどは「中踊り」と「側踊り」の間に挟まれて位置し、「側踊り」の外側には神社旗・警護などが立つ。

☆ **演目**

ア　多くの場合、踊る場所がそのまま演目名になっている。

イ　踊り歌は「東西静まれ　おしずまれ」という詞章で始まる。

☆ **その他**

ア　神社の秋祭りに奉納され、例年または多くの伝承地で豊年の年に実施される。

★　次に、下伊那地方と郡上地方の共通点をあげてみよう。

ア　踊り宿で装束をつけ、行列を調えて宿の庭で一踊りした後、再度行列を調えて次の目的地へ練っていく。

イ　宿は、本来旧家・草分けの家など地域にとって重要な意味を持つ家が務めてきたが、時代と共に公民館・集会所など公共施設を使用している。

ウ　踊りを実施する場所は地域によって区長宅・土地神の小祠小堂などを廻り、最後に寺・氏神の庭などで踊る。

エ　各踊り場では、「道行き」「庭入り」「本踊り」「引き踊り」という定められた順序で踊る。

オ　踊り歌は「東西静まれ　おしずまれ」という詞章で始まり、庭ほめ、神仏ほめなどがあり、その後に豊年を喜ぶ内容、新仏を供養する内容などになる。

カ　「かけ踊り」の後で盆踊りを踊るが、郡上では昼に「かけ踊り」を奉納した後、夜に神社の拝殿などで改めて踊るのに対して、下伊那では踊り場ごとに踊る。

キ　両地域とも有名な盆踊りである「新野の盆踊り」「郡上踊り」が行われている。

★　次に下伊那地方と郡上地方の差異について記してみよう。

ア　実施の機会と時期は、下伊那が多くの場合新仏供養として七月・八月盆を中心に寺・新仏を迎えた家の庭で行われているのに対して、郡上では盆過ぎの九月・一〇月の秋祭りに豊年祝いとして氏神に奉納されている。

イ　芸態は、下伊那が柳や切り子燈籠などの作り物を輪の中心にして、太鼓打ち・鉦打ち・ささら摺り・棒振りなどの踊り手が輪になって踊り、笛・歌・名号旗などが輪踊りの外側に位置しているのに対して、郡上では踊り手の「中踊り」が美しい花を背負い、腹の太鼓を打ちながら踊り、それを取り巻く「側踊り」は一〇人前後・数種類の揃い装束の者と、少人数の大黒・おかめなどで構成され、笛・歌などは「中踊り」と「側踊り」の間に位置する。

ウ　踊り歌の詞章は、下伊那の新仏供養では「かけ踊り」「念仏」「和讃」「手踊り」という構成であり、和讃は新仏にふさわしい内容のものであるのに対して、郡上の秋祭りでは神社の境内や踊り

宿などの庭で歌われる詞章内容は、ほとんどが庭ほめ・神社ほめなどである。

三　風流踊りの展開

次に、下伊那地方と郡上地方に伝承されている「かけ踊り」には、かなり違いがみられるにもかかわらず、同じ種目名で伝承されている理由について考えてみたい。その前段階として、風流踊りの歴史的な展開を簡単に理解しておきたい。

1　風流拍子物

風流拍子物は、一四世紀末から一五世紀前半にかけて見られるようになり、正月の松囃子と盆の念仏拍子物があった。正月の松囃子は、風流傘などの華やかな作り物を中心に鉦・太鼓・鼓・笛などを演奏する人々が、にぎやかに囃し立てながら行列を練り、要所要所で簡単な芸能を演じつつ移動した。また、盆の念仏拍子物も同様に鉦・太鼓・ささらなどを演奏する人々と共に念仏を唱える人々を加えて、風流傘・切り子燈籠といった風流の作り物を移動し、新盆を迎えた精霊を中心にその送り迎えをした。初期に出現した風流拍子物の実行者は村落共同体の人々であり、彼らは風流の作り物に地域の悪霊・精霊をつけて囃子によって移動し、地域外へ送り出すことを目的としていた。

一五世紀後半になると、奈良や京都の大社寺や身分のある人々も風流拍子物を張行するようになった。彼らは猿楽や延年の演目を流用したり、新しく棒振りや鷺舞、燈籠かつぎなどといった華やかな装束の踊り手が登場してきた。山路氏によれば、風流の最大要素は風流傘であり、祇園会の綾傘鉾は風流拍子物以来の代表的な例である。また、島根県津和野の有名な鷺舞は、拍子物の姿を現在に伝承した代表的な芸能であるという。鷺舞の例で明らかなように、風流拍子物の芸態にはまだ集団舞踊こそ登場していないが、仮装の趣向によって、若干の振りや歌謡を伴っていたという。[10] さらに、植木氏によれば、現在近畿地方に伝存する風流拍子物の「地域的類型」としては、以下のような四種目をあげることができるという。

a　ヤスライ花（京都市　今宮神社境内社　疫神社四月の花鎮め祭りに行われる）。

b　丹後の踊子（京都府舟木と黒部の踊子、その他竹野・通下などの氏神の秋祭りに奉納される籔・鞨鼓・太鼓（2人1組）などの踊子（青年・子ども）の行列で移動しては踊る。厄除け信仰を伝えている）。

c　ケンケト・サンヤレ（サンヤレは滋賀県守山市小津神社五月の祭礼で、別名「長刀祭り」とも。少年多数の長刀振り・2人1組の太鼓・籔摺りなどが行列を練り、要所要所で踊る。ケンケトは滋賀県竜王町・蒲生町で行われている五月の祭りで、「イナブロ（サギ）」と称する鉾を長刀振りが先導して囃し渡す）。

d　志摩大念仏（三重県宮川河口域に分布する初精霊送りの盆行

事で、念仏を囃子として太鼓・鉦などをうちつつ踊る）。

以上をあげることができるという。[11]

2　風流踊り

一五世紀末期には作り物風流を主体とした風流拍子物と、踊りを主体とした踊り念仏が見られるようになり、両者を併せて「念仏風流」などの用語が用いられた。またその一方で、「盆踊り」「念仏踊り」などの用語も使用されるようになり、一六世紀前半になると盆踊りが恒例化し、踊る場所や踊り堂なども作られた。踊りが主体で風流の趣向は二の次になり、各郷村や町衆以外にも在京武士などが踊り組を組織して相互に踊りをかけあった。一六世紀後半の京都では、風流は踊りの要素をさらに発展させ、従来の風流拍子物を風流傘などの作り物と共に「中踊り」として、自由な扮装で楽器を奏しながら踊り、その「中踊り」を囲んだ統一装束の踊り衆を「側踊り」とする大規模な踊りの形式が調えられた。風流拍子物以来の伝統を継承した風流踊りの典型として必ず例にあげられるのは、慶長九年（一六〇四）八月、豊臣秀吉の七回忌に八日間にわたって行われた豊国神社臨時祭で奉納された、京都の町衆による風流踊りを描いた「豊国祭礼図屏風」（六曲一双の左隻）である。[12]

現在、西日本各地に伝承されている風流踊りの多くは、「小歌」と称する物語的な歌謡を伴っているが、芸態的には「側踊り」を失って「中踊り」だけが固定化したものであり、植木氏による「地域的類型」による風流踊りでは、以下のような説明がなされている。

☆「カッコ踊り」→組み歌形式の小歌で腰鼓姿で作り物の花などを背負った踊り子が中心になり、地拍子（歌で踊る部分）と節拍子（歌のない囃子で踊る部分）で構成され、節拍子が主体で地拍子ではカッコの踊りが「側踊り」の囃子にもなる。カッコは腰鼓形式の締め太鼓のこと。

☆「ジンヤク踊り」→「カッコ踊り」圏内で、その一曲として伝承されている。この曲自体で一つの様式をもち、風流踊りの成立を考える上で重要である。この踊りには大小の二種があり、本来小は大に付随した所望の踊りであった。入端・本踊り・出端の構成で、節拍子の振り付けが変化に富み、移動してその場にふさわしく長短自在に踊る様式を備えている。

☆「小歌踊り」→定型組み歌の地拍子で踊る。囃子方が独立してその囃子で音頭とともに踊る。踊子全員が同じ採り物で踊るのが基本で、歌謡を楽しむ。楽器編成も単純で締め太鼓一つの伝承もある。

☆「振踊り」→主題を曲名とする組み歌で「側踊り」が主体となり、側踊りは楽器を持たず、節拍子で太鼓持ち・太鼓打ち・棒振り・新発意が踊る。地拍子が主体の場合は「小歌踊り」[13]である。

山路氏は、「側踊り」が独立して近世調の盆踊りとなり、現在も「中踊り」と「側踊り」が一体で踊る姿を残しているのはわずかであるとして、岐阜県郡上地方の「嘉喜踊り」、徳島県西祖谷地方の「神代踊り」、滋賀県甲賀市土山町の「花笠踊り」などをあげている。[14]

おわりに―現行「かけ踊り」の位置づけ

先に、『嬉遊笑覧』を引用して、江戸時代の市街地で伝承されていた小町踊りは「かけ踊り」と称され、集団で目的の場所へ練り込んで踊り、踊り込まれた方はすぐに踊りをかけ返す様式であったことを記した。このような江戸時代の様式は、一六世紀前半に京都近郊の郷村や在京武士などが踊り組を組織し、相互に踊りを掛け合った様式を継承したものであり、遊戯性の強いものであった。しかし、現行「かけ踊り」の伝承地は、両地方とも市街地とはかけ離れた山間地帯であり、行列を整えて目的地へ練り込んで踊るが、相手が踊りを返す遊戯的な要素は全くない。その理由は、両地方とも神事や仏事として伝承してきた故である。下伊那地方では、九カ所の伝承地中、下栗・満島神社秋祭りの「かけ太鼓」・中井侍秋例祭（湯立て祭り）「宿入り・道中囃子」の三カ所で、切り子燈籠を行列に加わえることはない。和合と日吉、大河内・坂部・向方および泰阜村の「榑木踊り」には、切り子燈籠と柳、名号旗や神社旗が多数行列に加わえられている。「榑木踊り」は祭礼踊りであるが、新仏供養を主目的とした「念仏踊り」「かけ踊り」の芸態をそのまま流用したものと考えてよい。

下伊那地方で注目すべき伝承は、下栗の「かけ踊り（シデ踊り）」であり、この踊りはシデ笠に赤い着物をつけた小女郎四人が踊り手として加わっている。大正から昭和にかけて「雨乞い踊り」として踊られていた時代があり、この時に小女郎は一二人で、「側踊り」の役目を果たしていた可能性がある。三六年間の中断を経て昭和四七年に復活されて以後、「雨乞いのかけ踊り」といわれるようになり、復活後踊られることがなくなった「あみだ様の踊り」「がらん踊り」「みだ様踊り」などの詞章内容は、物語的なものである。このような経緯から、風流拍子物として伝播した「かけ踊り」が「雨乞い踊り」に用いられたことで、「小歌踊り」的な性格を付加していた可能性が考えられる。

郡上地方の場合、寒水の「かけ踊り」には、①天明元年（一七八一）②寛政七年（一七九五）③文政三年（一八二〇）に記された「行列次第」が残されており、いずれも総人数は五〇人前後で、現行諸役と芸態から推測して、現在に至るまであまり変化していない。四人の「中踊り（太鼓3・鉦1）」と子どもの籠摺り、および田打ちを中心とした「側踊り」の構成は、現行そのままといってよい。②寛政七年では「側踊り」に子どもの花笠と奴が加わり、③文政三年には花笠が消えて道化が加わっている。また、「踊子一五人」という記述は、現行の諸役から見て歌うたいであることがわかる。郡上地方の「かけ踊り」は、伝播当初から秋祭りの奉納芸として「中踊り」と「側踊り」を備えた様式であったといえよう。

下伊那地方の「かけ踊り」は、江戸時代の初期に「風流拍子物」が伝播したものと考えられ、時代と共に多少の変化はあるものの、地域の悪霊・精霊・新（荒）御霊を圏外に鎮送する目的を継承している。また、郡上地方の「かけ踊り」「かき踊り」は、江戸時代中

期以後に「風流踊り」が伝播したものであり、豊作祈願・豊年祝いとして氏神に奉納する目的を継承している。

下伊那地方と郡上地方に分布している「かけ踊り」は、行列を練り込んで何カ所かで踊り、最終目的地を目指す形式の名称であって、踊りの目的・芸態・分類などによる名称ではない。誤解を恐れずに記すならば、「風流系獅子踊り」も「かけ踊り」の一種であると考えている。

この度の執筆が紀要への最後の論文となりました。お世話になった方々に感謝申し上げ、ご活躍をお祈りしてお礼にかえさせていただきます。ありがとうございました。

註

1 『「下伊那のかけ踊」調査報告書』（社団法人全日本郷土芸能協会作成　平成二二年二月二五日発行　文化庁文化財部伝統文化課）。P.16～26

2 前嶋茂子「かけ踊の研究」（『芸能の科学』3　東京国立文化財研究所芸能部編　昭和四七年三月三一日　平凡社）。P.1～41

3 植木行宣 芸能文化史論集3『風流踊とその展開』（二〇一〇年五月　岩田書院）・山路興造『近世芸能の胎動』（二〇一〇年六月三〇日　八木書店）。

4 植木行宣 芸能文化史論集3『風流踊とその展開』（二〇一〇年五月　岩田書院）。P.12

5 山路興造『近世芸能の胎動』（二〇一〇年六月三〇日　八木書店）。

6 喜多村信節『嬉遊笑覧』（12巻、付録1巻。文政13年（1830）自序。部類を分け、和漢の書から特に近世の風俗習慣や歌舞音曲に関する事物を集めて叙述・考証したもの）。

7 中村　浩『かけ踊り覚書』（昭和五八年七月一日　信濃毎日新聞社）。

8 註2に同じ。P.6

9 平成二十一年度　文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」『「下伊那のかけ踊」調査報告書』（社団法人全日本郷土芸能協会作成　平成二二年二月二五日　文化庁文化財部伝統文化課発行）。

10 註5に同じ。

11 註4に同じ。

12 『豊国祭礼図屏風』　豊臣秀吉の七回忌にあたる慶長九年（一六〇四）八月、豊国神社臨時祭りの様子を描いたもの。秀頼の命により豊臣家お抱え絵師・狩野内膳が描いたもので、祭礼から二年後の慶長一一年に豊国神社へ奉納された。六曲一双の右隻には八月一四日の様子が、左隻には一五日の様子が描かれたれており、風流踊りは八月一五日に大仏殿の前でおこなわれた。

13 註4に同じ。

14 註5に同じ。

第一表　下伊那地方「かけ踊り」比較表

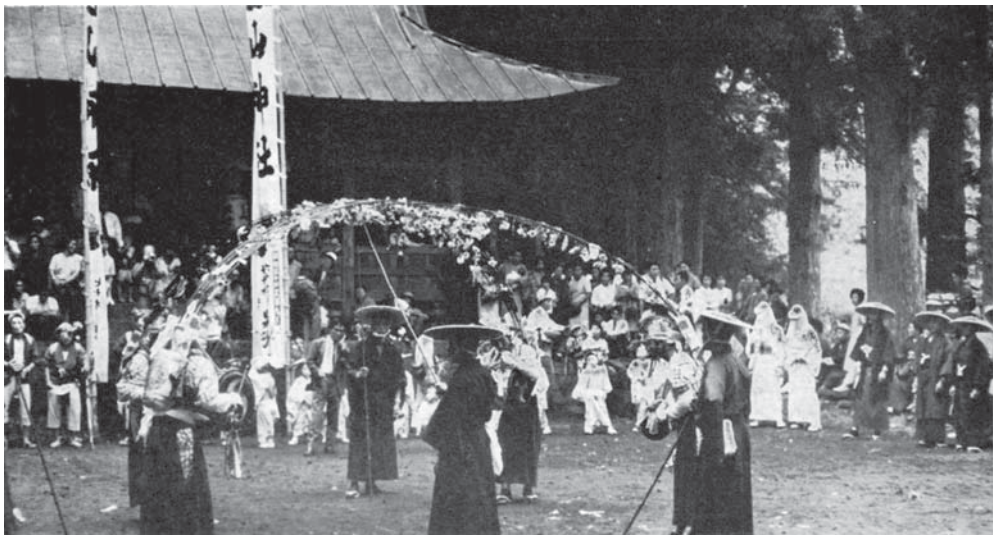
伝承地名	芸能名	踊り手	その他の諸役	演　目　名
①下　栗	かけ踊り（シデ踊り）	太鼓打・持２組棒振り２・鉦１・小女郎４	笛１・幣・旗各２歌多数	御宮踊・宮下の庭・がらん様・あみだ様・みだ様（盆踊り）
②和　合	念仏踊り	太鼓打・持４組鉦１・ヒッチキ・ササラ２組・奴２	笛６・旗２・切子燈籠・花・柳各１	庭入り・念仏・和讃（多数）（盆踊り）
③日　吉	念仏踊り	太鼓打・持２組・鉦１・ヒッチキ・ササラ２組・奴２	糸燈籠・旗各１花・傘各２・笛	庭入り・念仏・和讃（多数）（盆踊り）
④大河内	かけ踊り	太鼓打８・鉦１・奴・柳各１・	切子燈籠・旗・笛各１	かけ踊・念仏和讃
⑤坂　部	かけ踊り	太鼓打13・鉦１・棒振・笹各２・槍・長刀各２	旗・切子燈籠・笛各１	堂の庭・渡拍子・金比羅様の庭・伊勢音頭・和讃・手踊り
⑥向　方	かけ踊り	太鼓打７・鉦１・柳・奴各２	笛・大・小燈籠各１	拍子揃・道行・庭誉・念仏・蚊払い・手踊り・引踊り
⑦満　島	かけ太鼓			明治時代に新しく再構成されたもの
⑧中井侍	宿入り 道中囃子	大太鼓１・小太鼓３・花笠５	祓・大傘(歌)・笛各１・旗２	宿入・宮ほめ・道中囃子・笠くずし
⑨温　田	榑木踊り	大太鼓１・中・小３・鉦４	柳１・切子燈籠５・旗多数・笛多数・歌２	お祭り広場・お稲荷様鳥居前・本宮前・南宮神社鳥居前・南宮神社前・笠破

第二表　郡上地方の「かけ踊り」比較表

伝承地	踊　り　手		その他の諸役	演目名
	中踊り	側踊り		
②河　鹿	太鼓（拍子方）４・鉦引１	剣・ささら各２・田打笠各12・しで笠20・おかめ・大黒各１・他	出しの花・大傘各・幟２・笛10・音頭・歌各４・警護10・他	福江の木・他
③寒　水	折太鼓３・鉦引１	悪魔払・長刀各１・ササラ・田打各16・おかめ・大黒各２・大奴・小奴各８・花笠12・他	露払・音頭各２・襴宜・出花・台傘各１・５・笛16・踊子（地歌）頭１・踊子(地歌)15・他	中桁前の踊・お庭踊・殿前の踊・他（盆踊り）
⑤中津屋	太鼓（拍子打）３・鉦引１	花笠12・長刀２・おめ１・踊子（奴）37・他	高鼻・露払各１・笛・歌おろし各10・大神楽１組・他	本踊・十禅寺・屋志の踊・他
⑨坪　佐	太鼓（拍子方）４・鉦引１	長刀・剣各４・奴16・打13・花笠12・他	笛８・歌おろし４・花・田楽・大将各１露払・先箱・弓各２・他	本歌・引歌・伊勢大神楽・他

岐阜県郡上郡かけ踊分布図

写真



岐阜県郡上市寒水　白山神社「かけ踊り」拝殿前お庭踊り

出典：前嶋茂子「かけ踊の研究」『芸能の科学３　芸能論考Ⅰ』昭和47年３月31日．平凡社．東京国立文化財研究所編．